

講義の復権 —理論・実践からの分析—

報 告 者

安川 哲夫 (筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授)

梶川 裕司 (京都外国語大学マルチメディア教育研究センター
副センター長・教授)

大島 武 (東京工芸大学芸術学部 准教授)

指 定 討 論 者

村上 正行 (京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 准教授)

コ ー デ ィ ネ ー タ ー

國安 俊彦 (京都外国語大学・短期大学キャリア英語科 准教授)

概 要

ユニバーサル段階を迎えた日本の大学教育において、今その授業の在り方が厳しく問われている。従来の一方向的な、知識伝授型の講義形式には限界が指摘される一方、学生の主体的な参画を促す、双方向性が確保された授業の必要性が強調されているのである。実際に「グループ学習」や「プロジェクト学習」など学生の能動的な学習姿勢を促す様々な授業方法が開発されている。

こうした授業改革の流れは学生の気質の変化に伴い不可欠ではあるものの、一方では「講義」の有用性を必要以上に否定しているようにも思われる。果たして知識伝授型の講義は、もはや意味がないのであろうか。さらには現代の大学教育に必要とされる「講義」とはいかなるものであろうか。

こうした問題意識をもちつつ、本分科会では「講義」を理論・実践の側面から分析することとし、3人の研究者に報告をしていただく。そして報告及び議論を通じて、参加者一人一人が日常の活動に参考となる分科会を目指していく。

【第2分科会】

講義の復権 —理論・実践からの分析—

参加者数 48名

分科会報告者

第1報告者	安川 哲夫（筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授）
第2報告者	梶川 裕司（京都外国語大学マルチメディア教育センター 副センター長・教授）
第3報告者	大島 武（東京工芸大学芸術学部 准教授）
指定討論者	村上 正行（京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 准教授）
コーディネーター	國安 俊彦（京都外国語大学・短期大学キャリア英語科 准教授）

1. 分科会の趣旨

日本の大学においては、長い期間、知識伝授型の講義がその主たる授業形態であった。しかしながら近年、大学教育をめぐる環境は大きく変化した。18歳人口の減少に伴い大学教育は全入時代に突入するとともに、大学進学率が50%を超えるユニバーサル段階を迎えたのである。こうした環境の変化は大学教育の質的な転換を余儀なくさせ、授業形態もその例外ではなくなった。学生の学力低下や学習意欲の減退、学生間の学力格差の拡大等、様々な問題が引き起こされ、伝統的な講義形態は、新たな大学像に基づき、その再構築を迫られたのである。

そうしたなか、近年、「双方向型授業」を提案する動きが高まっている。教員が一方向的に授業をすすめるのではなく、学生の興味、関心や理解度を把握することに努める一方、学生自身の主体的な参加を促す授業展開が望まれているのである。平成20年12月に取りまとめられた中央教育審議会の答申、「学士課程教育の構築に向けて」においても、教育方法の改善の重要性について強調されている。同答申では、「学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのような刺激を与え、主体的に学ぼうとする姿勢や態度を持たせるかは、極めて重要な課題」であるとし、「既存の知識の一方向的な伝達だけでなく、討論を含む双方向型の授業を行うことや、学生が自ら研究に準ずる能動的な活動に参加する機会を設けることが不可欠である」と指摘している。

以上の流れを受けてか、本FDフォーラムにおいても双方向型授業に関するテーマは近年盛んに取り上げられており、双方向型授業に関する多様な方法が紹介さ



れてきた。例えば、筆者が昨年度担当した分科会においても、「グループ学習」におけるLTD話し合い学習方法や「プロジェクト学習」等が紹介され、学生の主体性を喚起する様々な方法が既に開発されていることが理解できた。こうした方法は、まさしく双方向性を確保したものであり、大きな成果をあげている。

しかしながら、新たな授業方法に関心が高まる一方、こうした流れは授業形態における講義の役割を必要以上に否定しかねない。とりわけ「大学改革」と自らの「生き残り」が重ねて考えられ、多くの人々が「焦り」を感じるなか、授業形態についても一方向的な流れができてしまう可能性は高いであろう。だが現実的には、時間的制約や物理的制約上、講義は大学の主たる授業形態として生き残っていかざるをえない。そうであるならば講義の有用性を再考し、今後の在り方について前向きに模索していくことが建設的な試みであると思われる。

こうした問題意識をもちつつ、本分科会では「講義」を理論、実践の側面から分析することとし、3人の研究者に報告をしていただいた。

2. 報告の概要

○第1報告：安川哲夫

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授

そもそも講義がこれほど長い間、大学の主たる授業形態でありえたのはなぜか。そうした問題を理解すべく、第1報告は、筑波大学の安川哲夫先生より、講義に関する原理的かつ歴史的な側面から報告がなされた。

安川先生によると、講義とは、中世ヨーロッパに大学が登場して以来、伝統的に受け継がれてきた授業形態であり、13世紀にはその形態はほぼ完成していたという。

そもそも修道院における「読書」を基盤として、13世紀のパリやボローニャに「大学」というものが出現するのであるが、講義もその「読書」の概念から発展したものであったという。しかしながら、従来の修道院における「読書」が、瞑想のための、いわば修練としての「聖なる読書」であったのに対して、大学における「読書」はアカデミズムの原理に基づく「知識獲得のための読書」へと変化していったという。

安川先生はそうした変化を、当時の講義スタイルを紹介しながら説明を加えている。中世の講義は、教員がテキストを原本としてそれに注釈を加えることであり、注釈書を作成することであった。また、その注釈とは、注解と討論という2つの要素から成り立っていたという。注解とは、作品の概説や難解な言葉の解説、作品をめぐる論点の整理などを行うことにより、学生の読書を助ける行為のことを指しており、それは講読へとつながっていく。一方、討論とは現在でいう演習のことであり、教員と学生間の相互討論をすすめることによって、問題を集中的に掘り下げていくものであった。この討論をすすめるために学生はさらに読書をしなければならないわけであるが、その読書の目的はもはや「修練」のためではなく、討論を有効にすすめるための「知識を獲得」することにあったという。ここにおいてアカデミズムの原理に基づく講義が成立し、現在に至るのである。

しかしながらこの講義スタイルが全く変化をせずに現在に至ったわけではなく、授業方法の改善は事あるごとに試みられてきたのだという。その具体例として、安川先生は、トマス・アクィナスとグラスゴー大学のジョージ・ジャーダインを取り上げている。

トマス・アクィナスは、その代表作「神学大全」によって知られているが、そこには従来の教育方法の弊害を改善するという明白な意図が読み取れるという。注釈書に

重きをおいたそれまでの講義は、十分な訓練を受けている者を前提としたものであり、初学者には理解し難いものであった。それを改善するためには、教員は、学生が学ぶべきことを学問体系に沿って提示すること、いわばシラバスを作成し、それに従って授業をすすめる必要があると主張していたというのである。

18世紀後半においては、ジョージ・ジャーダインが、講義について画期的な方法を実施していた。それまで講述中心であった講義を、話しかけるような形式ですすすめると同時に、知識の伝達よりも、むしろ「知的諸力（思考、判断、推論、伝達能力）」の改善を主眼とした授業方法に切り替えたのである。こうした大学改革は、やがて19世紀前半の初等教育に影響を与え、一斉教授を生み出すこととなる。

以上のような歴史的側面に加えて、機能的側面からも、講義の有用性について安川先生は説明をする。中世以来の講義において特徴的であったのは、「記憶」が重視されてきたことであった。その理由として「記憶」の基本的機能が機械的な暗記ではなく、「想起の技法」に結び付いていたからであり、学生が自ら探究し、発見し、創造することにつながっていたからだという。

こうして講義は大学において中核的な立場を占めていたのであるが、近年の大学教育をめぐる環境の変化に、安川先生は警鐘を鳴らす。アラカルト方式の授業が増え、専門の講義やゼミが極端に少なくなる一方、コア・カリキュラムが強調されることにより必修科目が増え、学生が自由に他の講義をとれる環境が狭まっている。また研究と教育の分離がすすみ、教員の教育的負担と学生の時間的・経済的負担が増えるなか、教員と学生が共に研究し学ぶという共同体的性格を、大学が奪う形になっているとの指摘をされた。

そうしたなか大学教育の根幹であった講義を見直し、質をあげていくことが重要であると結論づけられた。

○第2報告：梶川裕司

京都外国語大学マルチメディア教育研究センター
副センター長・教授

京都外国語大学の梶川先生からは、教育心理学に基づいた講義の実践的方法に関して報告があった。

近年、学生参加型授業が肯定的に評価され、大学教育のみならず初等・中等教育においてもその形式が拡大する傾向がある。しかしながら、こうした流れのなかでも、梶川先生は「講義にこだわる」と主張される。その理由

として、学生参加型授業が推進されている現況が、同授業の有用性が理論的に証明されたことによるものではないこと、同時に講義自体の有用性が否定されたわけではなく、むしろその利点を指摘することが可能であるということであった。

学生参加型授業が拡大した背景には、講義を「聞けなくなった」学生の存在がある。そして、こうした学生の学習姿勢の変化に対処するため、いわば対症療法的に導入されてきたのが学生参加型授業であったのではないかという。一般的に学生参加型授業は、学生達を活動させるという意味で、彼らの「自我関与」を高め、「学力の剥落」を防ぐと言われ、梶川先生もその点は長所として同意される。一方で、学生参加型授業の短所として、伝達できる情報量が少なくなること、学習者にその学習の目的・本質が伝わらない危険性があること、そして授業が低いレベルに固定化されてしまうことが指摘された。このように学生参加型授業にも克服すべき課題が存在するのであり、講義と比較して学生参加型授業の学習効果が高いという理論的な証明はまだなされていないかと梶川先生は指摘するのである。

また講義とは、学生が受動的な学習姿勢となり、彼らの内発的動機付けが喚起されにくいと一般的に言われるが、梶川先生はそれを否定し、講義の有用性について主張する。その理由として第1に講義では伝達できる情報量が多く、授業目的を明確に伝えることができると同時に、その目的に応じた教育課程を組むことが可能であること、第2に伝達する情報の質が保証できること、そして第3には伝達のための労力、授業コストを軽減できることを指摘した。また学生の能動的な学習姿勢を引き出す講義、内発的動機付けを喚起できる講義を展開することは可能であるとして、ご自身の授業の進め方を具体的に紹介され、そのポリシーについて説明された。特に強調されたのが、講義の真の目的は、内発的動機付けであり、それによって学び方の学習を成立させることが可能となるということであった。

○第3報告：大島武

東京工芸大学芸術学部 准教授

東京工芸大学の梶川先生からは、ご自身の企業における経験を基に、プレゼンテーションの発想を反映させた授業の実践的方法に関して話がなされた。

まずは大島先生が客員教員を務める山形大学を例にとり、同大学が中核となっているFDネットワーク「つば

さ」に関して説明がなされた。FD義務化にもかかわらず、その実施には大学間で温度差があるなか、山形大学は20数大学が参加をする東日本における最大のFDネットワークをつくりあげた。夏季FD合宿やFD合同研修会、学生FD会議など、様々な試みがなされているが、とりわけ「授業クリニック」や、悪い授業の類型化を試みた「あつとおどろく大学授業NG集」(DVD)、基礎的な学習スキルを学ばせる「スタートアップセミナー」(新入生の必修科目)は、山形大学独自の視点を取り入れたユニークな試みとなっているという。

続けてご自身の授業をケーススタディとして、プレゼンテーション型授業法について説明があった。そのポイントは、下記の5点に絞られる。

第1に大島先生はガイダンスの重要性を指摘された。大学における多くの科目が選択制となっているなか、いわば「契約」を結ぶという意味において、ガイダンスを実施するというのである。ガイダンスにおいても詳細なシラバスを配布し、毎回のスケジュールと評価システムを明確に提示し、初回の授業では最初の30分間にガイダンスをおこない、後半の30分間で「お試し授業」をおこなうとのことであった。

第2に授業の組み立てを明確にする重要性について強調された。話を構造化し、図解が可能な内容に組み立てること、そして時間の配分を予告し、学生達に授業の流れと全体像をイメージできるようにすることが大事であるという。

第3に効果的な表現技術として、言語表現を工夫することの意味について指摘された。あくまでも学生が知っている材料を例示すること、つなぎの言葉をうまく選び出し、話のナビゲーションとして活用すること、そして学生の知らない用語を使わないよう配慮すること、こうした事柄が学生の理解を助けるポイントになるという。また非言語表現を配慮することも学生の学習姿勢を改善することにつながり、gestureとpostureを使い分けること、教員の立ち位置や机間指導、アイコンタクトの効用について説明をされた。

第4に板書の効用について強調された。学生達にとって、板書は小学生の頃から慣れ親しんだ学習方法であり、必ず黒板を写すものと理解している。その習性をうまく活用することで、学生の学習姿勢を改善させることが可能であるとした。また板書をペースメーカーとして活用する方法についても紹介された。

第5に講義における双方向性の確保も可能であるとし、その方法として発問と紙ベースでのやり取りについ

で紹介された。とりわけ発問については、授業にリズムと緊張感をもたせるのが狙いであり、簡単な設問とすること、二択制とすること、ほめることという3つのポイントをおさえることが効果的であるとした。

最後に、まとめとして、研究者と教育者の求められているスタンスは異なるとして、結論を一つに絞って明快に言い切ることが大事であること、また講義の質をあげるためには、いろいろな先生方の講義を見ることが重要であるとして、話を締め括られた。

3. 指定討論・質疑応答など

○指定討論：村上正行

京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 准教授

京都外国語大学の村上先生からは、3つの報告を踏まえ、各先生に対する質問がなされた。

[安川先生に対する質問と回答]

安川先生に対しては、①講義の質は、昔と比べて上がっているのか、下がっているのか、②教員と学生が共に学びあう共同体性格が大学から薄れつつあるなか、その要因は個別の授業にあるのか、それともカリキュラムなど大学全体の問題にあるのか、③共同体を作るには、ゼミ形式の方がいいのか、④「講義が復権できるか」という問いのなか、過去の歴史が何を教えてくれるのかという4点について質問がなされた。

それに対して、安川先生は、①については、大学が大衆化し、教える学問の質自体が変化していった現状のなか、講義の質の問題については一概に比較できないとした。また②については、大学全体の問題、とりわけカリキュラムと機構の問題が大きいと指摘した。③について

は、ゼミの方がよいが、講義でも共同体に近づけるような試みはできるという。そして④については、まず学生が知ること、知りたいと思うことが基本であり、そのため講義は知的好奇心の喚起が一番の目的となる。教員は専門的な内容を深く教えるというよりも、そうした知的好奇心の喚起が重要であるとした。

[梶川先生に対する質問と回答]

梶川先生に対しては、梶川先生の授業に対する工夫は、教育心理学者であるからこそ可能なのではないかと、逆に教育心理学者ではない立場の者はどのように応用したらよいかという質問がなされた。

それに対して梶川先生は、教育心理学は授業運営に大いに役立っているとしたうえで、授業運営で重要なことは、教師自身が知的好奇心をもち、それを学生に伝え、そして授業そのものを楽しむこととした。

[大島先生に対する質問と回答]

大島先生に対しては、①授業クリニックの際にどのようなアドバイスをされ、何を気をつけられているか、②教育者と研究者の両立はどうすべきかの2つの質問がなされた。

それに対して大島先生は、①については、人のやっていること（アドバイス）にうまく適応するには、受け手の感動が必要であり、さらに試行錯誤しながら自己流にアレンジする必要があること、②については、大学教育を取り巻く環境を考えた場合、研究者と教育者の立場を場面に応じて、意図的に使い分けていく必要があるのではないかとのことであった。

以降、フロアとも活発な質疑応答・論議がなされ、盛会のうちに本分科会は終了した。



講義の復権—理論・実践からの分析—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 安川 哲夫

1. はじめに

- (1) 1960年代末～70年代前半の大学の講義
 - ・教授が講義ノートを読み上げ、それを学生が筆記する「講述筆記」
 - ・「黄色いノート」と質問を授業妨害とする教師
- (2) 「あれから40年」、講義はどれだけ改善されてきたのか？
- (3) 課題：講義が長い間大学の世界で君臨しえたのはなぜか？

2. 講義に関する原理的・歴史的考察

- (1) 「講義」(lectura)の概念の成立
 - ・「読む」(legere)ないし「読書」(lectio)から派生してきた中世ラテン語
 - ・中世大学の教育現場のなかで造られてきた言葉
 - ・「講義」と「説教」の二つの意味
 - (2) 修道院の「聖なる読書」(lectio divina)
 - ・意味に応じてアクセントを施し、声に出して読む
 - ・読書＝「修練」(disciplina)
 - (3) サン・ヴィクトルのユーグ(1096-1141)の読書論
 - ・『ディダスカリコン—読書の学習について』(1128年頃)
 - ・「順序を踏まえて」読み、細部を暗唱できるまでに記憶すること
 - ・読書＝学習＝知の探究
 - ・読書は、人間や市民が自らを形成していく上で必須の営み
 - (4) 中世大学の「講義」
 - ・テキストの注釈
 - ・注釈の二つの方法・形態……注解と討論
 - ・瞑想のための「聖なる読書」から、知識獲得のための読書＝「勉学」へ
 - (5) 大学の授業方法改善の試み
 - ①トマス・アクイナス(1225-74)と『神学大全』(1266-67)
 - ・初学者たちの教育に配慮せよ ⇒「学問の秩序に従って」授業を進めよ！
 - ・「……であるか」という「項目」別の講義
 - ②18世紀後半のグラスゴー大学(ジョージ・ジャーダイン)の改革
 - ・知識の伝達ではなく、「知的諸力」(思考、判断、推論、伝達能力など)の改善を！
 - ・「30～40人を越えない」学生集団との「打ち解けた対話」 ⇒「競争の精神」
- *19世紀の初等段階のクラス—斉教授に大きなインパクトを与える

3. 講義の条件—「記憶」が重視されたのはなぜか—

- (1) 記憶が教育の根幹をなし、学習と不可分の関係にある
 - ・記憶……知識を実用的な経験に変え、情報の断片をアイデアに組み立ててくれるもの

- ・記憶の基本的機能は発見的・創造的・探求的で、それは「想起の技法」である
→「機械的暗記による復唱」は想起や真の記憶とはみなされない。
- ・記憶による学習を訓練すること……講義＝教育

(2) 記憶は修辞学の重要な一要素

*キケロの『発想について De inventione』

- ①発想……自己の主張をもっともと思わせる「議論の型」を見つけること
- ②配置・構成……こうして見つけた事柄を秩序正しく配列すること
- ③表現……話そうとする事柄の内容にふさわしい言葉をあてがうこと
- ④記憶……事柄と言葉の核心をしっかりと知覚すること
- ⑤論術……事柄と言葉の威信に見合うべく、声と肉体を調整すること

(3) 記憶は善悪を知る力である〈思慮〉の一要素でもある

4. 講義は復権できるか？

(1) 弱まる〈教授－学生〉・〈教える－学ぶ〉の共同体

- ・教師……専門分化の進行と教育負担の増大
- ・学生……時間的余裕の欠如と経済的負担の増加

(2) 講義の効用

- ・教師にとって……体系的思考の訓練と他領域との交流
- ・学生にとって……効果的で確実な知識の獲得と探求の幅の拡大

(3) 過去の歴史が教えてくれるもの

- ・講義＝「教育すること」……大学の根幹
- ・教師自身の講義力と講義の質のレベルアップ
 - ①新しい知識の提供者
 - ②専門的知識と系統的知識との融合
 - ③問う方法技術の向上
 - ④厳格で公正・公平な成績評価システムの確立

「教育心理学」講義の実践から

京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 副センター長・教授 梶川 裕司

I. はじめに

1. 報告者自己紹介
2. 本日の報告の流れ

II. 報告者の体験談

1. 人生最初の非常勤講師での経験

- 1) まったく学ぶ気のない短大生

「子どもは一人だと天使だが、二人以上集まると悪魔になる」

- 2) 逃げ出すか、戦うか

- 3) J.S.ブルーナーの仮説にすぎる

「すべての発達段階のすべての子どもに学問性を保って、興味深く、強力に教えることができる」

- 4) 図表をふんだんに入れたレジュメを充実させた・・・が、

- 5) 学生参加型を導入した・・・が、

自分のグループの発表の時はまじめに発表している学生が・・・

- 6) デールの経験の円錐からのヒント

III. なぜ講義にこだわるのか？

1. 初等・中等教育段階の授業

- 1) 小学校の授業形態

- 2) 中学校・高校の授業形態

- 3) 「中1ギャップ」

2. 児童・生徒・学生を活動させる意味

- 1) 長所

①自我関与（動機づけ）を高める

②なすことによって学ぶ

→ 「学力の剥落」が起きにくい

- 2) 短所

①伝達できる情報量が少なくなる

②樽の法則

→ ゼミの例

3. 講義形式のメリット

- 1) 伝達できる情報量
→書籍>講義>学生参加型授業
- 2) 伝達する情報の質
→「樽の法則」にとらわれずに一定水準を維持できる
- 3) 伝達のための労力
→「一人ひとりの学生に応じた」は言うは易いが、
- 4) 受講人数
→授業コスト

4. 私の講義

- 1) 授業の見本としての授業
→教職課程の授業は、それ自体が授業の見本である（反面教師も含めて）
- 2) 目的は知的好奇心の喚起
→大学の授業では、インセンティブより内発的動機づけが重要（だと思う）
- 3) 自由レポート
→毎回複数課題を出し、そのうち書きたい課題があれば書く（上記のチェック）
- 4) デールの経験の円錐
 - ①抽象概念は、具体例（できるだけ身近な）を示して説明する
 - ②絵を描く
- 5) 客をいじらない
→学生への質問、一対一の話は、時間がもったいない
- 6) 講義は一方通行ではない
→学生の反応を感知して、展開を変更する
 - ①表情
 - ②発声
 - ③姿勢
 - ④瞳孔
 - ⑤着席位置
- 7) 雑談はしない
→授業料を払っている学生に失礼
- 8) 出席をとる
→出席を取らない方が人道的のようだが・・・
→オペラント条件づけから学ぶ
- 9) 黒板のすばらしさ
→黒板はすぐれた提示装置
- 10) 板書の設計
→法則性に従って板書

IV. まとめ

PAX
MUNDI
PER
LINGUAS

第2分科会 講義の復権—理論・実践からの分析

【第2報告】

「教育心理学」講義の実践から

京都外国語大学 外国語学部
梶川 裕司

Kyoto University of Foreign Studies

I - 1. 本日の報告の流れ

I. はじめに

1. 本日の報告の流れ
2. 報告者紹介

II. 報告者の体験談

1. 人生最初の非常勤講師での経験

III. なぜ講義にこだわるのか？

1. 初等・中等教育段階の授業
2. 児童・生徒・学生を活動させる意味
3. 講義形式のメリット
4. 私の講義

IV. まとめ

I - 2. 報告者担当科目 (本年秋学期分)

1. 教養科目

- ① 言語と平和Ⅱ (必修少人数ゼミ : 30人)
- ② 青少年の行動と心理 (講義 : 450人)
- ③ 教育研究 (演習 : 30人)
- ④ 教育研究ゼミ (卒論ゼミ : 16人)

2. 教職科目

- ① 学校教育心理学 (講義 : 100人×2コマ)
- ② 生徒指導・進路指導論 (講義 : 50人)

I - 3. 授業評価アンケートより

2009年度秋学期 京都外国語大学・京都外国語短期大学 授業評価アンケート 集計結果

調査年: 2009 調査: 梶川 裕司
調査期: 授業科目 (1科目)
対象: 1年次 1年次1組 1年次2組 1年次3組 1年次4組
調査対象者数: 27 回答者数: 27 回答率: 100%

授業科目	満足度								
001 言語と平和Ⅱ(必修少人数ゼミ)	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
002 青少年の行動と心理(講義)	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
003 教育研究(演習)	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
004 教育研究ゼミ(卒論ゼミ)	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
005 学校教育心理学(講義)	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
006 生徒指導・進路指導論(講義)	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0

I - 4. 報告者の授業評価 (総合満足度)

赤色線講義科目・青色線演習科目

科目	1	2	3	4	5
言語と平和Ⅱ(3.9)	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
青少年の心理と行動(4.6)	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
教育研究(3.9)	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
生徒指導・進路指導論(4.4)	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
学校教育心理学1(4.6)	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
学校教育心理学2(4.5)	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0

演習科目より、講義科目の評価が高い、珍しいタイプの教員ということで、今日、話させていただいたことになったのだと思う。

II-1. 某大阪の短大での人生最初の非常勤「教育心理学」講義の経験

- ベテランの先生からの初日のアドバイス
「この子に、何かを教えようとしてもムダですよ」
- 最初の授業—まったく学ぶ気のない短大生
「子どもは一人だと天使だが、二人以上集まると悪魔になる」

II-2. ブルーナーの仮説にすぎる

「すべての発達段階のすべての子どもに学問性を保って、興味深く、強力に教えることができる」

Bruner, J.S. 佐藤三郎訳 「教育の過程」 岩波書店
1986(改訂版)

II-3. 授業改善の努力

- 図表をふんだんに入れたレジュメを充実させたが……
見向きもしない。→ 授業の後で、床にレジュメが踏みつけられて散乱している。
- 学生参加型を導入したが……
自分のグループの発表の時はまじめに発表している学生が、他のグループの発表となると、まったく聞かず、騒音の嵐となる。

II-4. 彼女たちの特徴

- 一人の時と複数の時は別人格
- 学習性無力感の典型
- 知的なことに拒絶的
- さらに、知的な好奇心を感じることに違和感を持っている

「私たちは大学生のまねをしているだけ」
「先生に操られてる自分に腹が立つ」

II-5. 戦うか、逃げ出すか

- 後にわかったが、この短大では、若い非常勤講師の耐用年数は1年以内と言われていた。
- 故に年配の教員ばかり、その理由は……
- この短大で「もういません」と言われるまで、10年以上、非常勤を続けた。
- 「授業」というものを考えさせられ、とても勉強になりました。

III-1. なぜ講義にこだわるのか？

初等・中等教育段階の授業

- 1) 小学校の授業形態
児童参加型授業
- 2) 中学校・高校の授業形態
講義形式中心授業

3) 「中1ギャップ」

中学校の教科担任制と講義形式の授業についていけない生徒が増大している。
→ 結果として、低学力、不登校問題
現在、その対応策として「小中一貫教育」が推進されている。

Ⅲ-2. なぜ講義にこだわるのか？

- 学習者参加型の授業が、小学校から、どんどん上の段階の学校へと広がっている。
- これは理論的に有効であるというより、生徒(学生)が講義を聴けなくなったことが、その理由。
- 「講義」というものが旧態依然の遺棄されるべき方法であることが明らかになったのならば、納得できるが、しかし違うと思う。

Ⅲ-3. 学習者を活動させる長所

- ① 自我関与(動機づけ)を高める
とくに内発的動機づけを喚起しやすい
- ② なすことによって学ぶ
→ 「学力の剥落」が起きにくい
勝田守「日本の学校」岩波新書 1964

Ⅲ-4. 学習者を活動させる短所

- ① 伝達できる情報量が少なくなる
または必要なことが伝えられない危険性
- ② 学習者にその学習の目的が伝わらない危険性
- ③ 低いレベルの人にあわせることになる危険性
ディオゲネスの樽の法則

Ⅲ-5. 講義の長所

- 1) 目的を明確に伝えられ、その目的に応じた教育課程を組むことができる
- 2) 伝達できる情報量が多い
→ 書籍 > 講義 > 学生参加型授業
- 3) 伝達する情報の質保障
→ 必要な情報を伝授できる
- 4) 伝達のための労力の軽減
→ 「一人ひとりの学生に応じた」は言うは易いが・・・
→ 授業コスト削減(大学にとっては、経費節減。教員にとってはコマ数節減)

Ⅲ-6. 講義の短所

- 1) 学生が受動的になる
- 2) 内発的動機づけを喚起しにくい
- 3) 古い
新奇性がないため、学生を引きつけられない

Ⅳ-1. 私の講義

京都外大での教職科目
「教育心理学」講義の
運営ポリシー

IV-2. 真の目的は 知的好奇心(内発的動機づけ)の喚起

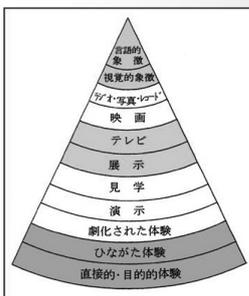
- 1) 大学の授業では、内発的動機づけの喚起が最も重要だと思う
- 2) 現代の知識は、数年～数10年で陳腐化
大学の時に学んだ知識では生きていけない
- 3) 大学で内発的動機づけを喚起された学生は、自ら学んでいく・・・ならば、学び方の学習が成立

IV-3. 授業の見本としての授業

- 1) 大学の授業は、あなた方が教師になったときの授業の見本であることを明示する
(反面教師も含めて)
- 2) これによって、自我関与・動機づけを高める

※ 教養科目の授業にはあてはまらないが、

IV-4. デールの経験の円錐に学ぶ



Dale, E.
Audio-Visual Methods in Teaching 1946 より

IV-5. 抽象と具体を繋ぐ

- 1) 大学の講義は、デールの円錐でいうと最上位の抽象レベルの高いもの
- 2) われわれはこれを、さもあたりまえに学生の前に提示するが、彼らにとっては抽象度が高く何のことがさっぱりわからない
例 コンピュータを初めて買ったときのマニュアルを思い出してください。
- 3) 具体的に抽象的な理論を説明する
→ 次のスライドにその具体的方法

IV-6. 理論は実験から説明する

- 1) 講義の半分は、実験の紹介
- 2) 必ず、書いて説明する
レジュメでもなく、パワーポイントでもなく
手で黒板に書きます。

IV-7. 黒板は、すぐれた教具(提示装置)

どちらがよく見えますか？

IV-8. 黒板は、すぐれた教具(提示装置)

どちらがよく見えますか？

IV-9. 表で説明することの意味

学生なら見る気がすると思われませんか？

区分	計		国立		公立		私立	
	入学志願者	入学	入学志願者	入学	入学志願者	入学	入学志願者	入学
文学部	339,210	48,883	9,348	2,278	10,305	1,893	319,557	44,872
文学部	14,235	1,489	-	-	-	-	14,235	1,489
神学部	974	183	-	-	-	-	974	183
仏教学部	972	463	-	-	-	-	972	463
外国語学部	70,875	13,823	8,148	1,738	4,484	1,042	58,043	11,150
人文学部	56,418	13,833	13,870	2,895	918	222	41,630	10,686
国際言語文化学部	93	82	-	-	-	-	93	82
比較文化学部	697	180	-	-	-	-	697	180
国際文化学部	15,421	2,597	570	145	948	134	13,003	2,318
現代文化学部	5,188	1,482	-	-	-	-	5,188	1,482
日本文化学部	305	88	-	-	-	-	305	88
国際言語学部	2,220	587	-	-	-	-	2,220	587
国際英語学部	2,053	185	-	-	-	-	2,053	185

IV-10. 図で説明することの意味

学生なら見る気がすると思われませんか？

IV-11. 絵で説明することの意味

1) 実験の紹介の大半は『絵』
絵をみることは、具体的体験の一つ

IV-12. 絵の例

IV-13. 絵の例

IV-14. 絵の例



IV-15.

内発的動機づけ喚起のための
レポート課題多数提示

- 1) 毎回の授業で、講義内容に関連したレポート課題を複数(3~6課題)提示する。
- 2) このレポートは、最低2課題提出が、単位認定の要件。ただし書きたいテーマで書くところがポイント
- 3) 3課題以上提出すると、一定の加点をする。
→ 一部、インセンティブを導入

IV-16. 自由提出レポート課題の例

- 知らないうちに自分の身に起こっている「古典的条件づけ」の例を考えてみよう
- 「古典的条件づけ」を利用したCMの成功例・失敗例
- 教育場面での「古典的条件づけ」の応用を考えてみよう
- 授業中に紹介した文献を読んでの感想
- 自由課題(自分でテーマ設定する)
例:「友だちに古典的条件づけをしました。」

IV-17. 客をいじらない

- 1) 学生への質問、一対一の話は、時間がはったいない
- 2) 予想外の応答が返ってきたとき、即座に、適切に応答できるか? いやできない。
- 3) 「一部の学生とだけコミュニケーションをしている」というネガティブな反応も・・・
→ 前回、誰をあてたかなど覚えていない
- 4) 発問の工夫で、全学生に考えさせる質問はあり得るが・・・
→ 小中学校の先生は、問答が一対一にならないような工夫をしている

IV-18. 雑談はしない

- 授業料を払っている学生に失礼

IV-19. だが、講義は一方通行ではない

- 1) 学生の反応を感知して、展開を変更する
 - ①表情
→ こちらの話に反応して表情が変わるか?
 - ③姿勢
→ 話を聞いていれば、前傾姿勢になっているはず。頭のつむじが見えていたら負け
 - ④瞳孔
→ 「目のかがやき」は認知できる
 - ⑤着席位置
→ 興味を持ってくれば、座っている席が、だんだん前に来る
→ 全体として前にきた、後にさがったかは把握できる

IV-20. 法則性ある板書をする

絶対写して
もらいたい
内容の領域

写してもいいし、
写さなくてもい
い領域

レポート課題
と文献紹介の
領域

(絵を描いてい
ることが多い)

IV-21. 出席をとる

1) 出席を取らない方が人道的のようだが...

2) オペラント条件づけから学ぶ



ご清聴ありがとうございました。

Kyoto University of Foreign Studies

プレゼンテーション型教授法の効果と課題

東京工芸大学芸術学部 准教授 大島 武

高等教育における「良い授業」は、どのようにしたら実現できるのか。わかりやすい授業、興味をひく授業、知識が身に付く授業……。これらを目指して多くの試行錯誤がなされ、発表され、FDの成果として蓄積されてきた。

しかしながら、多くのFD研修会や研究グループ等に参加して、周囲の教員とディスカッションする中、「良い授業の類型化」は難しいのではないかというのが、筆者の出した一つの結論である。専門領域、教員の個性、学生のプロフィール等は多様であり、「こうすれば大学授業はうまくいく」という魔法のメソッドは存在しないと思っておいた方が無難である。教育担当者にできることは、多くの事例に触れて、自己の教授法に適宜取り入れたり、反面教師にしたりすることであろう。こうした観点から、筆者の発表も、一つのケーススタディと捉えて頂ければ幸いである。

今回発表する教授法は、その多くを企業社会で広く実施されている「プレゼンテーション」技法に依っている。授業＝プレゼンテーションと捉えることには異論もあろう。しかし、とりわけ高等教育においては、プレゼンテーションの目指す「わかりやすさ」「印象深さ」「説得力」などが、授業効果に大きく関連するのも事実である。

講義への導入例として「概要説明」が挙げられる。大学での授業時間は決して短くはない。ダラダラと先の見えない話が続けば、学生は飽きてしまう。そこで、プレゼンの基本である概要説明を冒頭に行う。本日の目的は何か。どのような順番で説明するのか。時間配分は？ 授業内テストやビデオ視聴等はあるのか。あらかじめ90分の使い方をざっくり説明し、授業の受け手に対して心の準備をさせることで、聞きやすさを演出するのである。

表現分野においては、教員の立ち位置、アイ・コンタクト、表情、パララゲージ（声のトーンや話す速さ等）が重要な要素である。資料についても何を見せ、何を配るのか、プレゼンの世界では厳密に精査される。

こうした教授法テクニックには、専門分野の違いを超えて、ある程度の汎用性があるかもしれない。むしろ課題も多くもある。会場の方々との情報交換を通じて、プレゼンテーション型教授法の功罪を改めて考えてみたい。

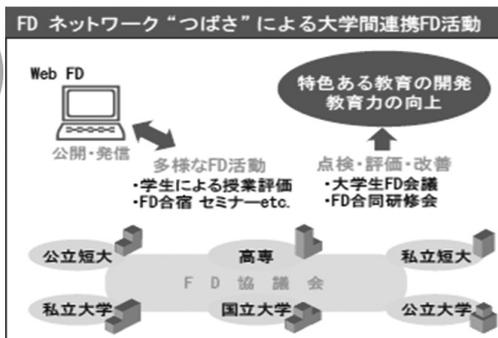
第二分科会
【講義の復権】理論・実践からの分析

プレゼンテーション型 授業法の効果と課題

報告者：東京工芸大学 大島 武

はじめに 山形大学のFD活動

1-1 さまざまな仕掛け



1-2 総論から各論へ

【授業クリニックとは？】

1. 授業力に自信のない教員が自主参加
2. カウンセリング受講
3. 全授業のVTR撮り → フィードバック
4. 担当(指導)教員とのディスカッション
5. 受講学生とのディスカッション
6. 本人によるふりかえり

1-3 独自の視点

「よい授業」ではなく「悪い授業」の類型化
【FD・SDのDVD三部作】

1. 「あっと驚く！大学授業NG集」
2. 「学生主体型授業へのアプローチ」
3. 「あっと驚く！大学事務NG集」

1-4 そしてカリキュラムへ

全学共通必修科目
「スタートアップセミナー」の開始

読む・書く・調べる・話す
…リテラシーの要請

ここまで易しくする？
賛否両論

【ケーススタディ】 私のプレゼン型授業法

2-1 ガイダンスのしかた

- シラバスを詳しくしたワンペーパーを配付。
- スケジュールと評価システムを明確に。
- 初回は「ガイダンス」と「お試し授業」に終始。
- 最初の三週間でポリシーを徹底。
- 「納得して授業を履修してほしい」と強調。
←シラバス批判はひとまず置いておく...

2-2 授業の組み立て方

- 90分を三つのパートに分ける
←義家先生流
- 話を構造化し、図解できるようにする
←久恒先生流
「図に描けない話はするな」
- 時間の使い方を予告して、守る。
←全体像を見せる

2-3 言語表現の工夫

- 「例示」の多用
人は何ごととも既知のことと結びつけて考える
 - 「つなぎ言葉」の活用
「たとえば」「つまり」・ゆっくり間をとって誘導
 - 「用語の選択」と位置づけ
知らない用語一つで授業は一気に難化する
- ビオトープ・レセプト・フィクサチーフ・SIMロック

2-4 非言語表現の効果

- 身体表現
gesture と posture の使い分け
教員の立ち位置
- 対人距離
机間指導の有効性
- アイコンタクト
全体をバランス良く見渡す
プレッシャーと激励

2-5 資料配付と板書

- 教科書の指定
買わせるなら毎回使う
- レジユメの効果
情報を与えずがない
メモのスペース確保／時に穴埋め
- 板書は最高のビジュアル
小学校時代からのお約束
絶妙のペースメーカー

2-6 双方向性の確保

- 発問のしかた
大切なのはリズム
簡単に／二択で／ほめる
- 紙ベースでのやりとり
山形大学巨大出席カード
(フィードバックを忘れずに)
大手前短期大学「なるほどポイント」
(学期末には特に有効)

まとめ 基本はコミュニケーション

■授業はコミュニケーション■

- 授業／学生対応に一貫したポリシーを
- 教師は演じるもの
教育者 VS 研究者
- 講義のウデを上げるには？

「講義の復権」 指定討論

指定討論者 京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 准教授 村上 正行

FDフォーラム分科会 「講義の復権」 指定討論

京都外国語大学
マルチメディア教育研究センター
村上正行

本分科会の経緯

- 昨年度のFDフォーラムの分科会「主体的な「学び」を目指した学習支援 ―グループ学習とプロジェクト学習の方法と実践―」を実施

- 分科会の内容は大変面白かったけれど、、、

グループ学習万能なのか??

今回の講演者

- 安川先生
 - 講義の有効性を歴史的な経緯、理論
- 梶川先生
 - 教育心理学に基づいて講義を実践
- 大島先生
 - 授業の組み立て方・表現方法・様々な工夫

安川先生

- 講義の歴史
 - 読書→注釈→討論→購読→講義
 - 「瞑想のための聖なる読書」から「知識獲得のための読書(=勉学)」へ
 - 13世紀に教科書なるものができる。教科書を持ってきていない学生は出席とみなさない、という大学もあった
- トマス・アクィナス(13世紀)やジャーダイン(18世紀)が大学の授業方法改善を試みている!

講義の問題とは?

- 一斉教授が生まれたのは19世紀中盤
- 大学での講義が問題になってきたのは20年ほど前?
 - 大学の大綱化(1991年)
 - 大学のユニバーサル化

そもそも、講義の質は、昔と比べて上がっている、下がっている??

学びの共同体

- 〈教授-学生〉・〈教える-学ぶ〉の共同体、が弱まってきている
 - コアカリキュラム・アラカルト方式

- 個別の授業の問題ですか? それともカリキュラムの問題が大きいですか?
- 共同体を作るには、ゼミ形式のほうがいいのでは?

講義＝大学の根幹

- 講義＝大学の根幹(＝「教育すること」)

教員はこれからどう取り組んでいけばいいでしょうか？

レジュメ 4. 講義は復権できるか？
(3)のお話をもう少ししていただければ？

授業者の専門性

- 内発的動機づけの喚起をメインに
- 教育心理学の理論に基づいて、実践(かなり詳細に)に結びつけている

- これは先生が教育心理学者だからできる？
- 教員のみなさんに伝えるには？

黒板の重要性

- 個人的な話ですが、梶川先生の板書術は大変面白いのでぜひ実現してください

大島先生

- 講義におけるさまざまな工夫が提示
 - 授業の組み立て
 - 言語情報・非言語情報
 - 発問(簡単に／二択で／ほめる)

明日からすぐに参考になりそう！？

有用な手法を活用するために

- たしかにそのまま使えそうですけど、なかなか難しいのも現実

授業クリニックの際にどのようなアドバイス？をされていますか？
何か気をつけていることはありますか？

大学教員とは？

- 教師は演じるもの
教育者 vs 研究者

教育者と研究者の両立はどうすべき？

